

Title	死にゆくことの言語化とそれに伴う看護師のバリアに関する研究
Author(s)	内布, 敦子
Citation	
Issue Date	
Text Version	ETD
URL	http://hdl.handle.net/11094/24561
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	うちぬのあつこ 内 布 敦 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 17370 号
学位授与年月日	平成14年12月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	死にゆくことの言語化に伴う看護師のバリアに関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 柏木 哲夫 (副査) 教授 倉光 修 助教授 恒藤 暁

論 文 内 容 の 要 旨

死にゆく患者と死について話すことは、看護師にとって大きな課題である。特に終末期ケアに従事する看護師にとって避けて通ることのできない問題である。豊かな経験をもとに死にゆくことを患者との会話で言語化し、率直に話を進める方法について著した書物も出版されているが、知識としてそれを知っていても、臨床の状況の中で死を言語化することは依然としてむずかしい。本研究では、第2章において、事例を通して死について話す看護師の方略や構えをより実践的で具体的に提示した。死を患者との間で言語化することによって、患者は親しい人との別れを述べ、自分の思いを表現して周囲の人々に理解してもらうことが出来た。しかし、事例を通して確認した言語化の方法は、単純に臨床の文脈の中で機能するわけではない。そこで、第3章では、臨床の文脈の中でどのように死に関する会話が回避されるのか、話すことに対するバリアは何か、そのバリアの意味は何か、バリアはどのような構造になっているのかについて、29名の看護師の体験を分析することによって抽出した。看護師が死に関する会話をすることに対してもっているバリアのバリエーションは大きく、最終的に11のバリアのカテゴリーが抽出された。バリア一つ一つの意味を文脈を読むことによって検討し、バリアは、実は看護師にとって必要なものであり、高い共感性と関連していることを看護師達の語りから確認することが出来た。考察を経て、死にゆくことを言語化するというに伴うバリアは、無理に乗り越えるのではなく、むしろ大切にすることが必要であるものを多く含んでいることが考えられた。患者と看護師が作り出す文脈の中で、看護師自身の有り様や対応の仕方は様々であり、患者との相互関係の中で対応の意味や価値が決定されるのではないかと思われる。

本論文全体を通して導き出したことをまとめると次のようになる。

- ・EOLにおける死の言語化によって、患者が自分自身の思いを表現することができ、周囲に別れを告げることを可能にし、平穏な死を導くことが事例研究によって確認された。
- ・死を言語化することを支援する看護援助として、身体を感じを表現させることや具体的な表現方法を提供することが有効であった。
- ・死にゆくことの言語化をサポートすることを可能にする「看護師の構え」として、グループインタビューによって妥当と確認されたのは、〈患者の身体の状態を把握している〉、〈患者に死を言語化する機会を与えたいという思い〉、〈看護師が自分自身の不安を認識している〉、〈患者との間に信頼関係があると感じられる〉の4項目であった。
- ・死にゆくことの言語化に伴う看護師のバリアは11のカテゴリーに分類され、看護師に内在するバリアは、むしろ

在るのが自然であると解釈された。時間や場所など環境的なバリアは調整可能なバリアとして改善できるものと思われた。

- ・死にゆくことの音譜化を推進している要因も分類され、看護師のケアの意志や患者の話す力など、看護師と患者の相互関係の中で死に関する会話が可能になるという現象が確認された。

ほとんどの看護師は、患者から死に関する会話をもちかけられたとき戸惑ってしまう自分を否定的に評価している。しかし、死に直面している患者に死について問われ、戸惑うことは日常的に長い時間を患者と共有している看護師にとってむしろ自然な反応である。看護師がこのような感情を否定的に評価するのではなく、むしろ自分自身の感情を認め大切に扱うことが、看護師としてのケアの方向性として重要であると思われる。バリアの構造の解明は、看護師が自分の状況とらえるのを助ける。また、死に関する会話を促進している患者の話す力やその力を信頼すること、また看護師自身が持っているケアの意志をさらに明確に意識することが出来れば、看護師はより肯定的に死の会話場面を認知できるのではないかと思われる。死にゆく患者が死を言語化することを支援する技術を理論的に体系づけていくことも今後期待される。

論文審査の結果の要旨

審査では、著者によって事例による体験が詳細に分析され、実際に死について話すという試みから抽出された方略が示された。さらに、死にゆく患者を看護する看護師を対象としたフォーカスグループインタビューによって、看護師にあるバリアがカテゴライズされ、それぞれのバリアの性質やあり方が検討された経緯について、適切に説明が行われた。研究のオリジナリティや完成度も高く、博士学位に相当する論文と判定した。